

中学3年生の担任であったN先生である。

この先生は、私が3年生になるときに、私の学校に転勤してきた。40代後半のなんだかパツとしない感じの第一印象であった。ところが、このN先生は、すごかったのである。まるで魔法使いのような英語の先生だった。

その当時の私たちの学年は、英語が極端に悪い学年だった。そのことは、中学2年生の冬に新教研テストの結果が出るまでは分からなかった。それまで私の英語の成績は悪くはなかった。相対評価というものは恐ろしい。いくら英語ができない集団でも、その中で上位にいれば、成績はいいのである。

私は中学2年生の冬に初めて新教研テストを受け、その結果に愕然とした。英語だけが極端に悪かったのである。それまでは、校内の成績しか目にしていなかったので分からなかった。これから中学3年生になる私は、高校進学と自分の将来にぼんやりとした不安を覚えた。

そこに登場したのが魔法使いN先生であった。このN先生も、私の学年の英語の実態には愕然としたそうである。英語の授業は、プリントが用意され、私は先生の言った通りにしていただけなのだが、英語の成績がどんどん上がっていくのだった。家で特別に勉強をした覚えはない。よくわからないのだが、英語ができるようになっていったのである。

新教研テストで偏差値50ぐらいだった私の英語は、3年生の1月には、ついに70を超えた。1年間で20以上も上がったわけである。驚異的な伸びである。学校の定期テストでも3年生の最後の期末テストでついに100点をとった。自分でもびっくりであった。N先生は、一問だけ高レベルのいわゆるひっかけ問題を用意していたのだが、私はひっかからなかった。ひっかかるほどの実力がなかったらしい。その証拠に、一番できる友人は、ちゃんとひっかかっていた。

自分では努力している気がしないのに、どんどん成績が上がっていくのである。今考えても、教員になった今でも、あのときのN先生の英語の授業のすごさがよくわからない。だから、魔法としか表現しようがない。

N先生は、私が中学校を卒業したあとも、毎年秋になると、私の実家に梨を買いにきてくださった。退職なさったあとも、毎年秋になると来てくださった。ある年も、いつものように、私の両親と話をして我が家をあとにしたそうである。そして、帰路の途中、車を運転中に亡くなってしまわれた。もともと心臓がわるいN先生だった。生前、最後に話をしたのが私の両親となってしまった。私は、機会があったら、N先生に直接魔法の英語の授業のことを聞こうと思っていた。しかし、それは叶わなかった。

私は、学校の先生をしているが、いつもN先生の魔法の授業を追い求めている気がする。退職するまでに、魔法を手に入れ、若い先生方に伝授するのが私の目標の一つである。もしもN先生が私の前に現れなかったら、私の進む高校も、その後の人生も大きく変わっていたことだろうと思う。出会いとはすばらしいものではあるが、時にこわいものでもある。魔法使いに会わせてくれた自分の幸運、いや運命に感謝したいと思う。